

3. 小児甲状腺がんの多発

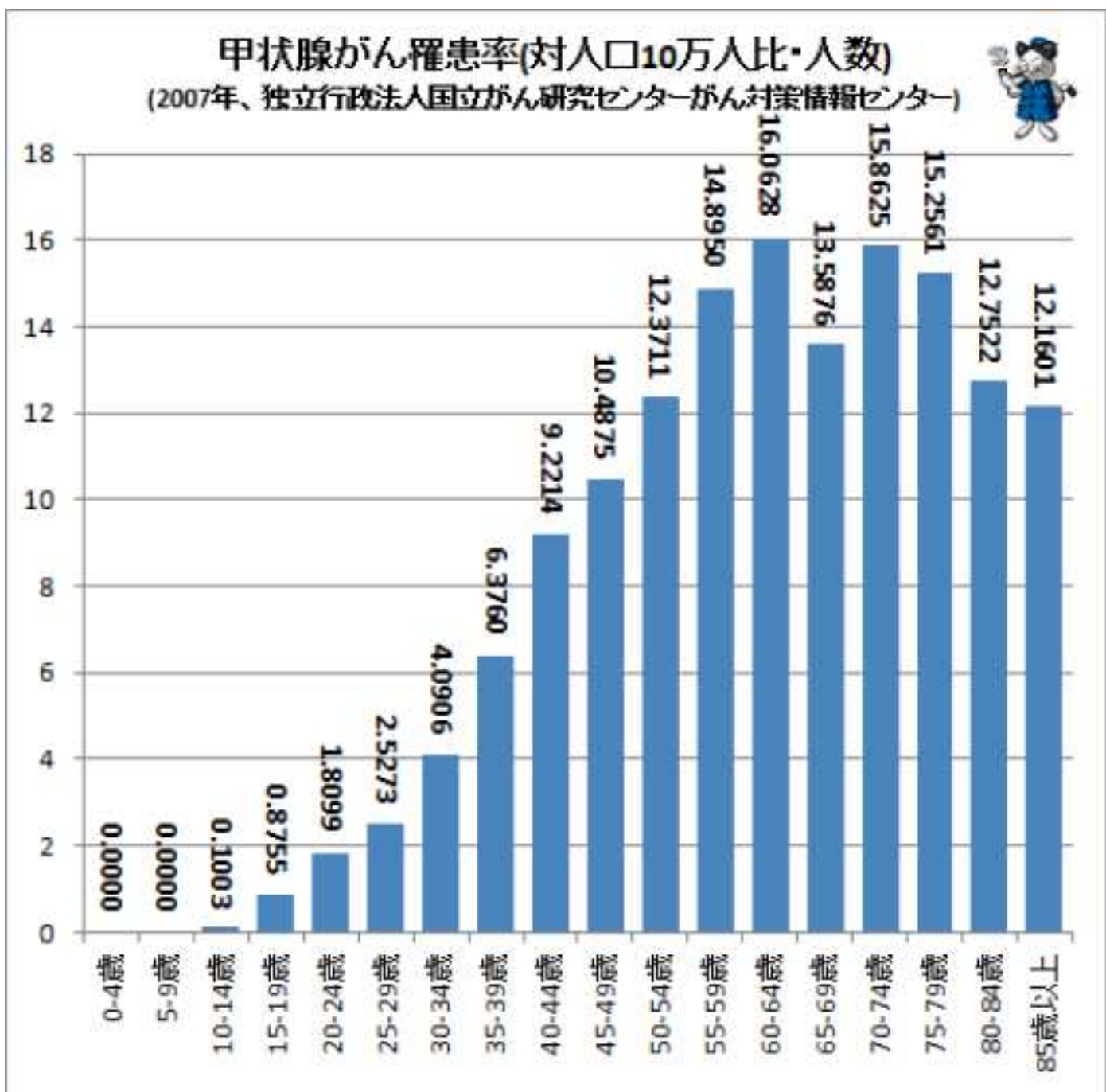
2017年2月22日

三原翠

チェルノブイリにおける甲状腺ガン

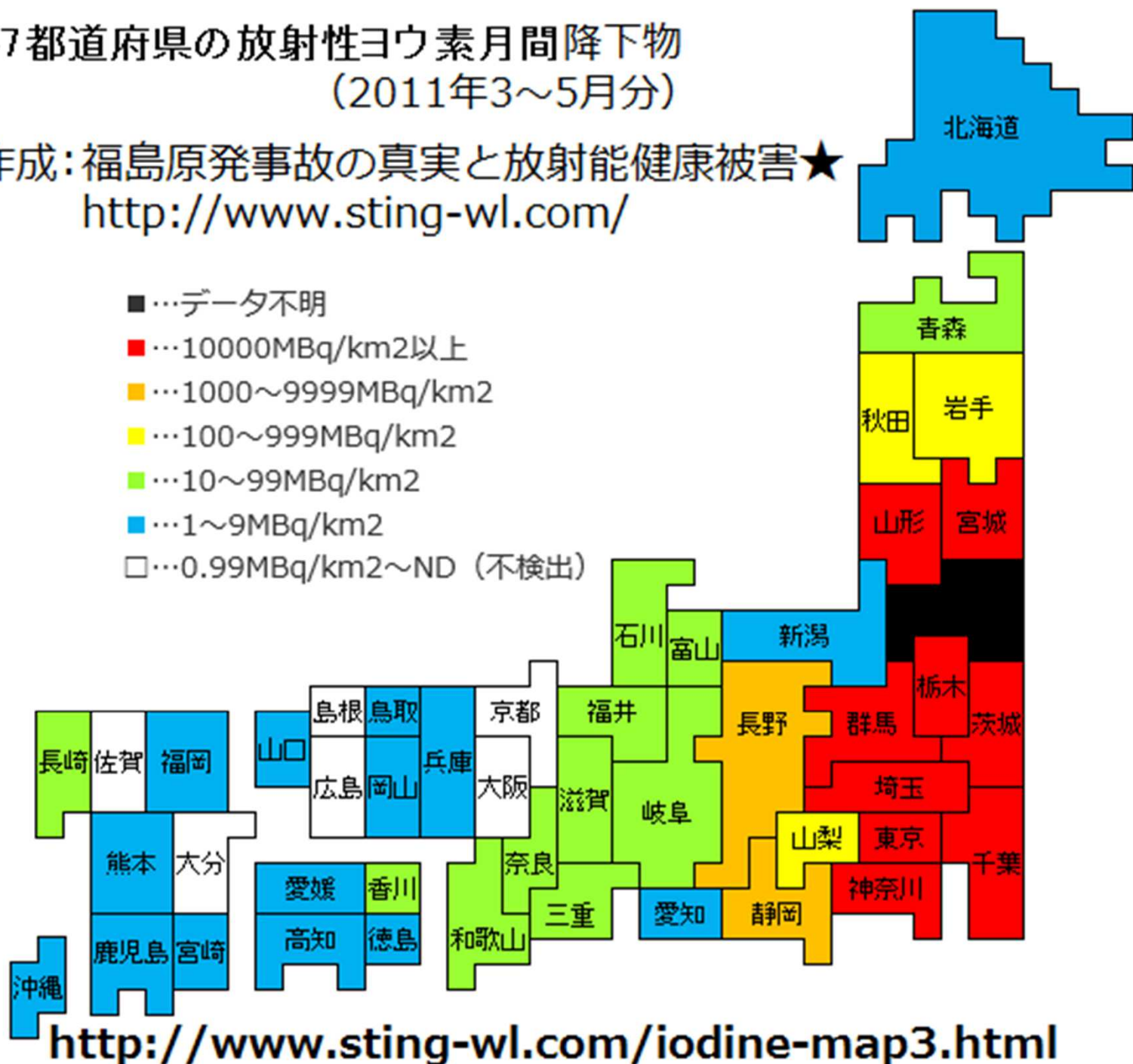
- チェルノブイリにおいても、小児甲状腺ガンの多発は、なかなか認められなかった。1986年に事故が起こり、2000年になって、事故以降生まれた子供にほとんど甲状腺ガンの発症がない事から、ようやく国連科学委員会も認めた。チェルノブイリ事故の原因の病気としては、現在まで小児甲状腺ガンのみである。(山下俊一らの研究)
- チェルノブイリでは、事故後、35万人の子どものヨウ素被曝量を測定しているが、日本では1000人程度。
- チェルノブイリにおいて、当初セシウム汚染との比較が行われたが、相関は見られず、ヨウ素汚染と一致した。

年齢別甲状腺ガン発症率



47都道府県の放射性ヨウ素月間降下物
(2011年3~5月分)

作成:福島原発事故の真実と放射能健康被害★
<http://www.sting-wl.com/>



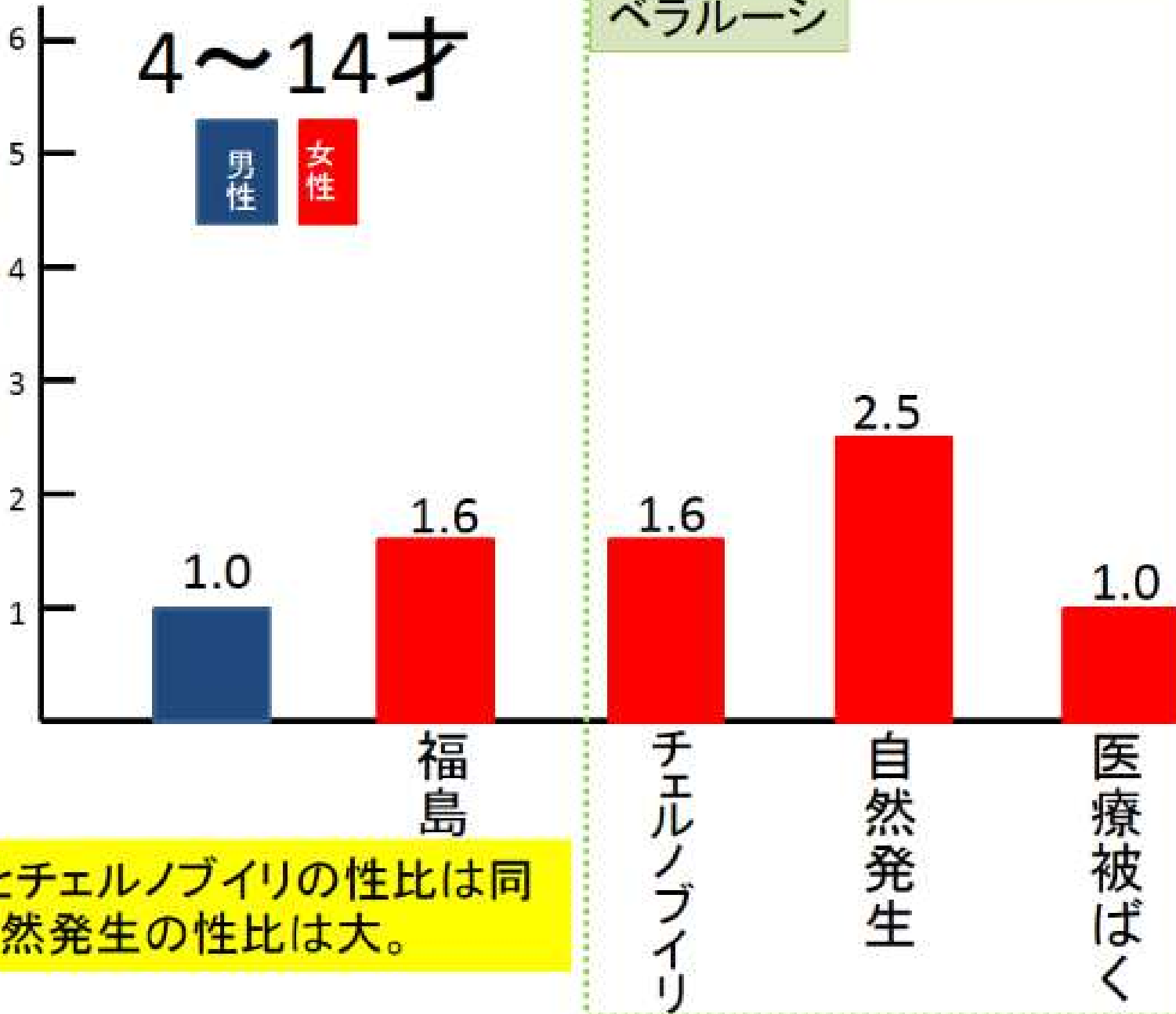
<http://www.sting-wl.com/iodine-map3.html>

甲状腺がんの性比(男性1)

4~14才

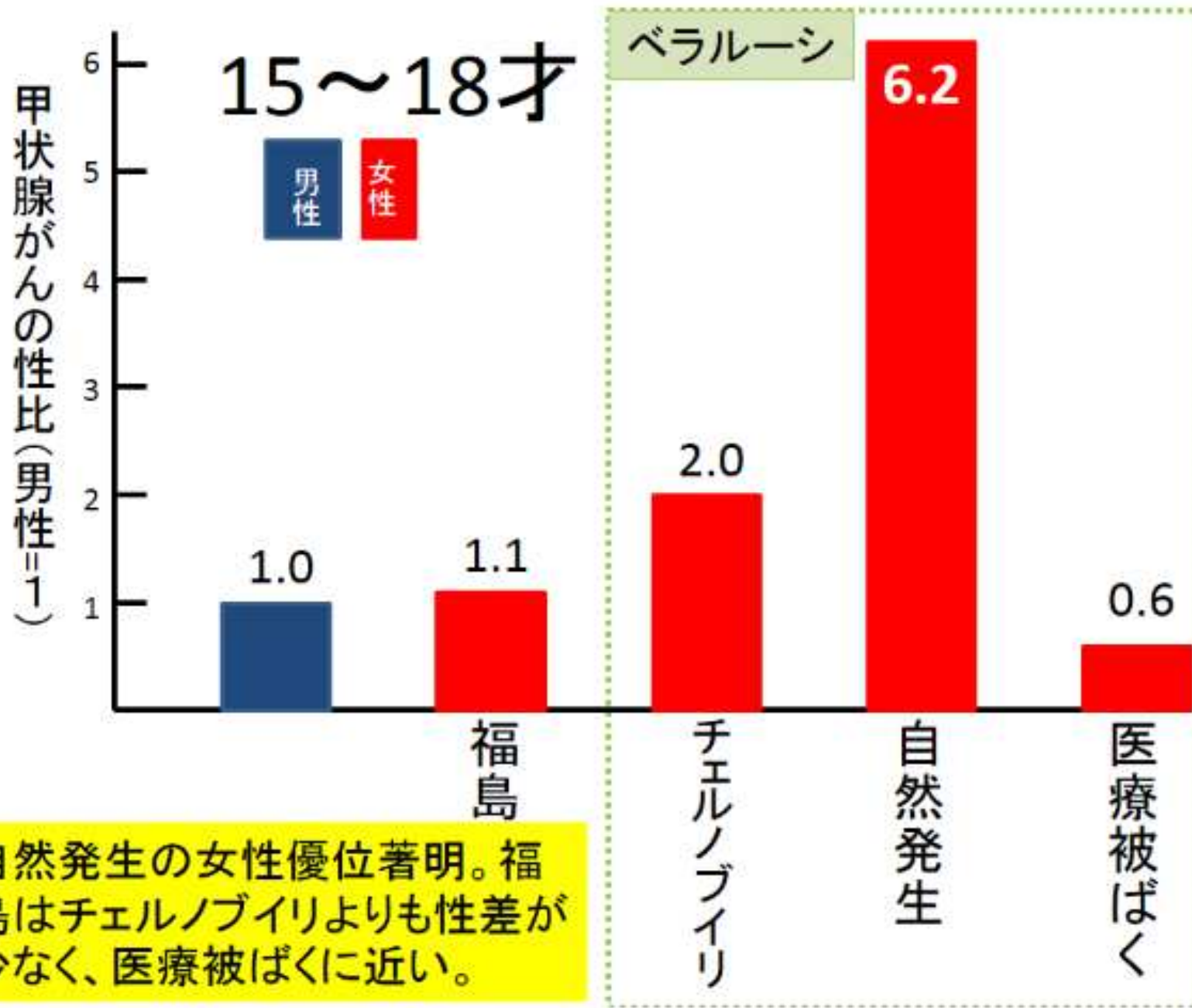
男性

女性



福島とチェルノブイリの性比は同じ。自然発生の性比は大。

福島に関しては、2011年から2013年までのデータと思われる。

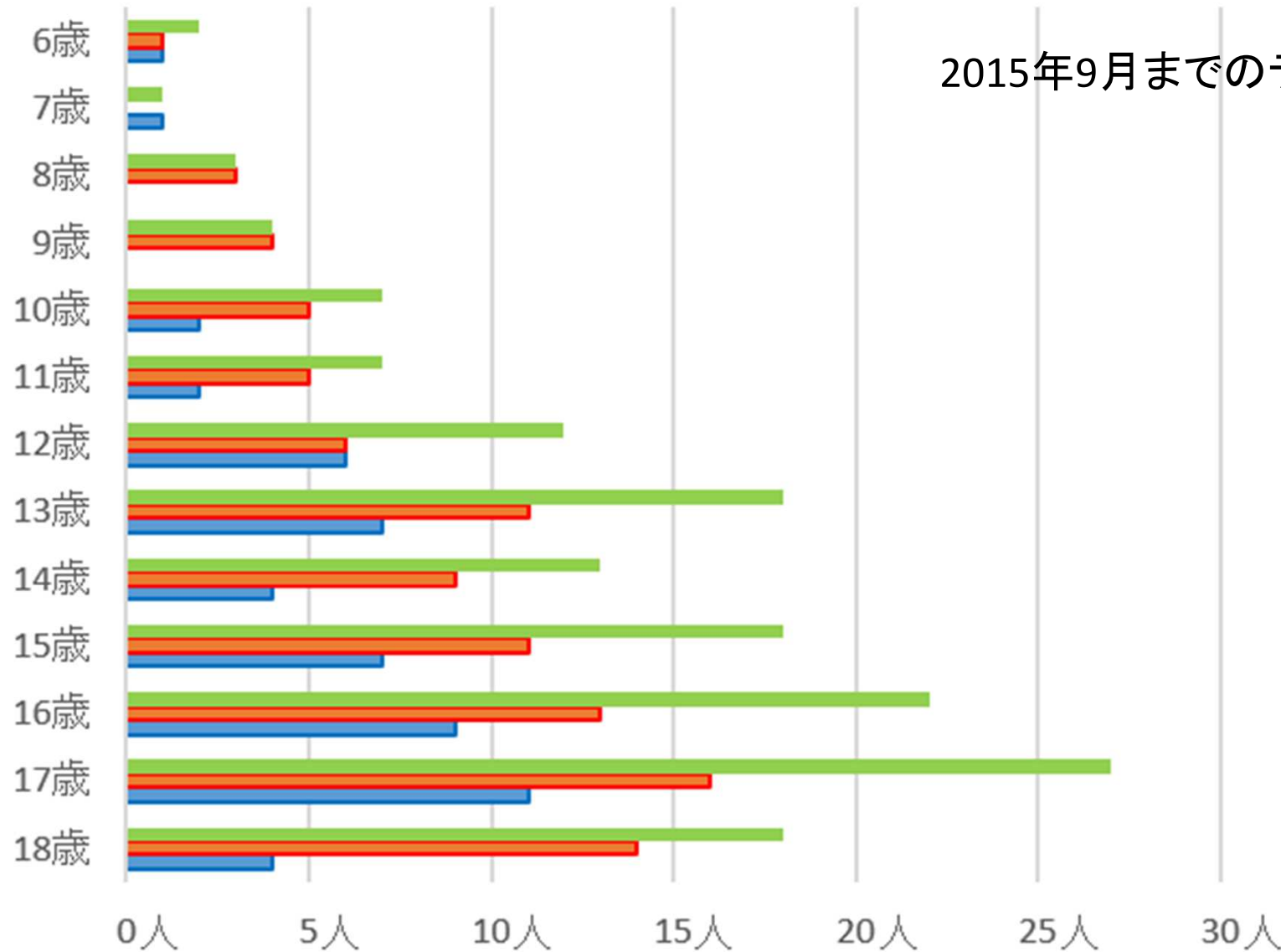


福島に関しては、2011年から2013年までのデータと思われる。

甲状腺がん発生人数

■ 合計 ■ 女 ■ 男

2015年9月までのデータ



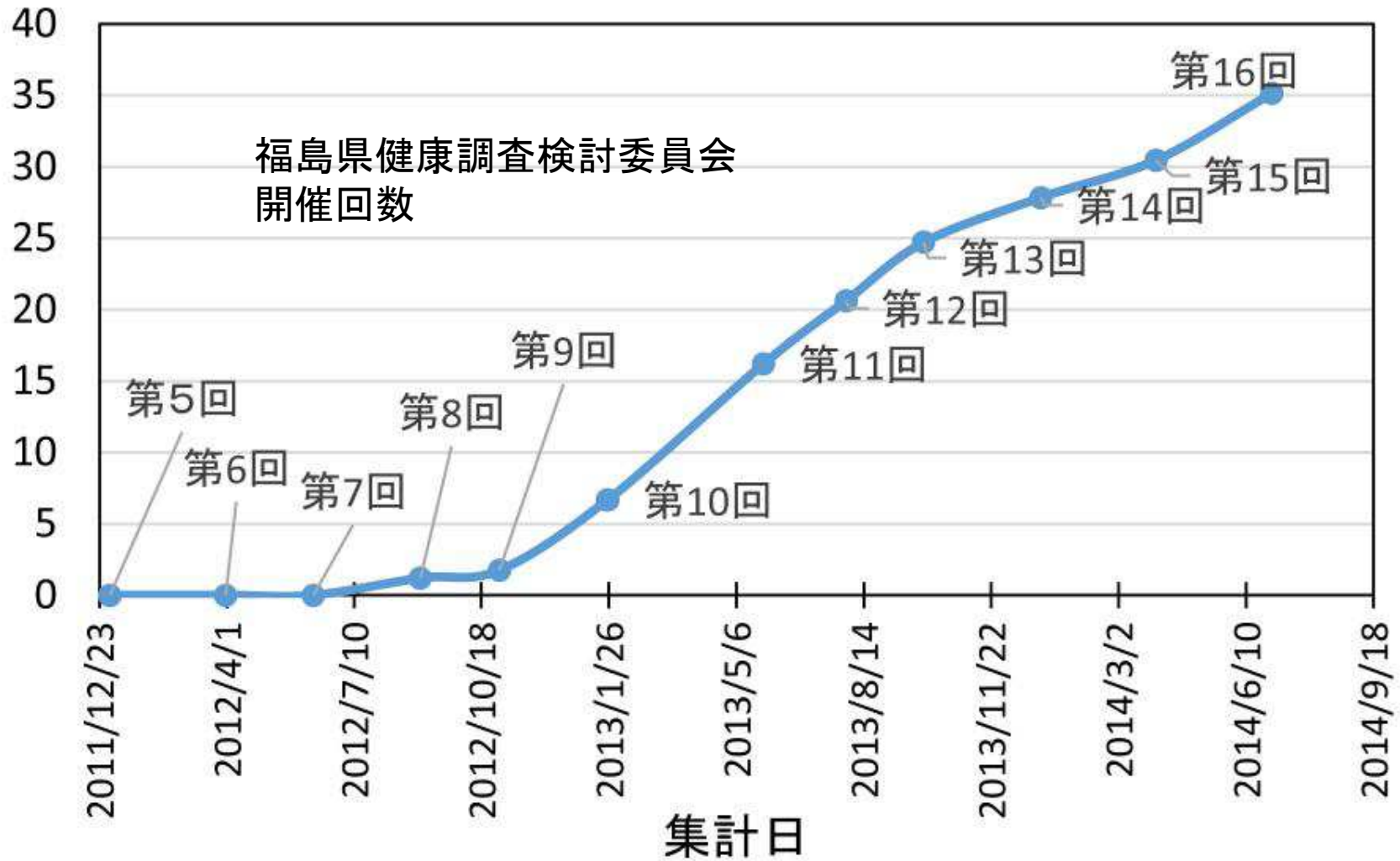
チェルノブイリの時の 小児甲状腺ガンに対する態度

ニューヨーク・タイムズ紙とインディペンデント紙は揃って、研究者たちが腫瘍の「侵襲性」にも驚いていたと書いた。WHOのベールヴァーストックは6年後に振り返って、次のように語った——「1992年、小児甲状腺癌の頻発として、チェルノブイリ事故の影響が最初に報告されたとき、放射線専門家の内輪では、懐疑論で迎えられた。懐疑論の一部は疑う余地なく科学的だった（「ヨウ素131の発癌性は低い」）が、一部はそうでなかった...これは科学的直感なるものが誤解を招きうることを諭す教訓話である。このような論争さえなければ、救援の手をもっと早く差し伸べることができただろう」

スクリーニング効果でない傍証

小児甲状腺がん「発見率」

悪性ないし悪性疑い／
一次検査受診十万人



まとめ

- 放射性ヨウ素によって、甲状腺ガンの多発が起こる事は、既にチェルノブイリで証明されているが、日本政府は福島事故での甲状腺ガンの多発を認めようとはしていない。
- 福島県民健康調査検討委員会でも、明らかな多発が認められるのに、更に第三者委員会を作ろうとしている。
- 長崎大学の原発推進派(重松逸造、長瀧重信、山下俊一)によって、常に放射能の被害はないと喧伝されている。
- 185人もの小児甲状腺ガンに罹患した多くが、リンパ節、肺転移をしている。(老化に従って増加する甲状腺がんとは明らかに異なる様相)
- 十分な医療費の保証がないので、民間で“NPO法人3.11甲状腺がん子ども基金”が出来、1人10万円の医療費補助を行っている。<http://www.311kikin.org/>

追補：甲状腺がん子ども基金の報告

- 給付が決まった患者：
年齢(事故当時)5-18歳 男性25人、女性28人
- 地域：福島41人、神奈川4人、埼玉2人、宮城・群馬・千葉・東京・長野・新潟各1人
- 県外の患者は重症化が多い。
アイソトープ治療の患者：福島2人、県外5人
- 現在、甲状腺検査は福島県のみしか行っていない。東日本全体でも行う必要がある。

(2017年2月18日東京新聞)